

令和3年度 研究概要

1. 研究主題／副主題

どの子ども輝く生活科・社会科学習の追究 ～対話を通して、学びを深める～

2. 研究主題について

(1) 主題設定の理由

本校においては、平成23年度から28年度の2期 6力年に渡り、学習の基盤となる言語活動を充実させることが思考力・判断力・表現力の育成に効果的であると考え、「子供の思考力を高める言語活動のあり方」を主題として研究を進めてきた。

その中で、思考力を「言語を用いて思考の筋道を明らかにし、それを生かして新しい考えを創り出していく力」と捉え、この力は、子供が問題意識をもって主体的に取り組む「問題解決学習」の過程で育つと考え、低学年・生活科、中学年・理科、高学年・社会科の各部会で実践に取り組んできた。

研究の成果として、自分の考えをもち、友達と考えや根拠を伝え合った後に、自分の考えをもう一度見直す場面を設定したことで、相手のよい考えを取り入れて自分の考えを見直したり、自分の考えの確かさに気付いたりする姿が見られた。また、学習過程の工夫と合わせて、【書く力】【聴く力】【話す力】の基礎的学習スキルを継続的に指導したことで、事実を根拠として、考えを言葉で表現する力が高まった。

一方、自分の考えを人前で話すことに抵抗感をもつ子供が多く、個々の多様な考えが、話し合いの場で十分に生かされないことも多く見られた。また、【書く力】【話す力】に比べて、相手の考えを正確に聴き取る力や、相手に寄り添って聴く力が弱く、互いの考えを深め合おうとする意識を育てるまでには至らなかった。

以上の成果と課題から、6力年の研究の基本方針を継続するとともに、子供一人一人が主体的に学習に参加し、自分や仲間の考えのよさを生かして協働的に問題解決をするための資質と能力の育成を目指す、どの子ども輝く生活科・社会科学習の追究を研究主題とし、子供の思考を深める「対話」を副主題として平成29年度より、3年間研究を行った。

3年間の研究において、「どの子ども輝く」を教師自身が願いをもって実践したことで、必要感をもって対話をする子供の姿が多く見られた。子供の主体的な学習への取り組み、教師が感じる子供の成長の姿から、対話を生じさせる問いや気付き・思考を深める対話への支援など、子供が対話を通して、思考を深めるために必要なことを考え、検証してきた。

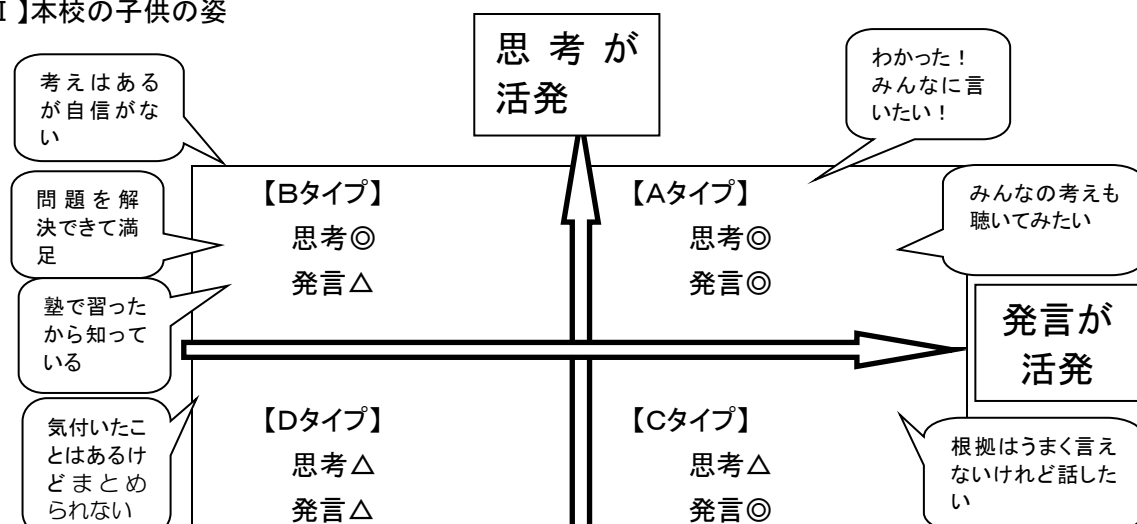
令和元年度(3力年の最終年)の実践では、子供の意識調査からも、「自分の考えを伝えたい」、「伝えることができる」が5月に比べ、12月は向上していた。社会科の学習に限らず、学級経営なども含めた年間を通した取り組みが、子供たちに自信をもたせていると考える。子供の「思いや願い」を引き出すために、言葉をキーワード化したり、「魅力ある問い」の設定を意識した、吟味された発問や資料提示の仕方など、子供の思考を意識した単元が開発されたりした。また、気付きや思考を深めるための支援として、学習カードや思考ツールなどを効果的に使うことで、子供たちも、自分の考えと向き合い、対話する楽しさを感じながら学習することができた。

令和2年度より研究主題である「どの子ども輝く生活科・社会科学習の追究」を継続し、副主題を「子ども

の思考を深める「対話」から「対話を通して、学びを深める」に変更し、研究主題を2期目の2年目として、令和3年度の研究を進めていく。副主題の変更理由としては、学習における対話が子供たちの学びの過程で重要であることを教師が実感したことで、より一層対話を通して学びを深めていく子供の姿を理想とし、さらに研究を追究していきたいという思いを受け、令和2年度変更した。令和2年度では、重点1の対話をしたくなる「魅力ある問い」の設定では、教師の発問の投げかけや資料の提示の仕方を工夫したことで、子供たちが活発に対話をするようになった。子供たちが事象とどのように出会うか、そして何について考えさせていくかを吟味しながら学習を進めていくことは大切だということが分かった。また、重点2の生活科「気づきのよさを感じる」振り返り活動の充実、社会科「思考の整理や見通しをもたせる」振り返りの時間の充実では、振り返りの時間を単元の中で意識的に組み込むことで、子供たちは、その時間の学習を整理したり、次の学習につなげたりすることができた。一方課題として振り返りのもたせ方が学年の実態に合っていたのか、学年で工夫して実践を行ってきたが、学校全体として振り返りをどのように行っていくのかなど、新たな課題が浮かび上がってきた。効果的な振り返りを行うことで、子供の学びが深まっていくことを実感したことで、この重点を令和3年度も継続し、本校の研究をより確かなものへという思いをもって、研究を進めている。

(2)「どの子も輝く」とは

【図 I】本校の子供の姿



上の図は、これまでの研究によって明らかとなった本校の子供の姿を、4つの型に整理したものである。

次の表は、子供のタイプを分類する時の本校で定めた評価基準である。

	○	△
思考	<p>【1・2年生】 気づきから自分なりの考えをもっている。 新たな思いや願いをふくらませている。</p> <p>【3・4年生】 +自分の考えと他の考えを比較し、共通点や違いを見つめることができる。</p> <p>【5・6年生】 +自分の考えを見つめ直すことができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・問いを捉えることができず、何を考えるのが分からない。 ・自分なりに考えようとしているが、問いとずれてしまう。 ・自分の気づきや考えを、言葉でまとめることができない。 ・左記に到達しない。
発言	<p>【全体】 進んで挙手をし、発言する。(つぶやき○)意見を述べるだけでなく、質問や付け足しも積極的に行動とする。</p> <p>【ペア・グループ】 相手に進んで自分の考えなどを伝える。相手の発言に対して、言葉による反応も積極的である。</p> <p>※どちらかでも当てはまれば○</p>	<p>左記について、全体やペア・グループでも発言が少ない。 ※どちらも、もう一歩。 ※どちらも、まだまだ。 (自分の考えへの自信がない・抵抗感があるなどにより、発言が少ない。)</p>

研究主題にある“どの子ども輝く”とは、このようにさまざまな特性をもった子供たちが、主体的に仲間と考えを交流し、互いの良さを認め合いながら学び合う姿を表している。その実現のために、昨年度より始まった新たな3年計画では、教師が子供のタイプを意識しながら、手立てを講じた中で、子供がどのように変容していくのか分析していく。特にDタイプの子供も参加できるような支援を考えて指導することで、どの子ども学習の中で輝きをもてるような授業づくりを目指していきたい。

また、子供たちに意識調査を行ったところ、自己肯定感が低い児童がいることが分かった。「考えが合っているか不安」や「間違えたときに笑われたらどうしよう。」など理由は様々であるが、子供たちの自己肯定感を高める手立てや友達の考えを受け入れる支持的風土作りも大切だと考える。自宅待機、自宅学習を経験した子供たちだからこそ、対話を通して学ぶことの良さを実感させていきたい。

3. 研究副主題について

(1)「対話」とは

対話の定義

教材・題材をもとに共有化された問題や課題に対して、多様な思いや考えをもった子供が、他者や自己と応答し合い、相互作用すること

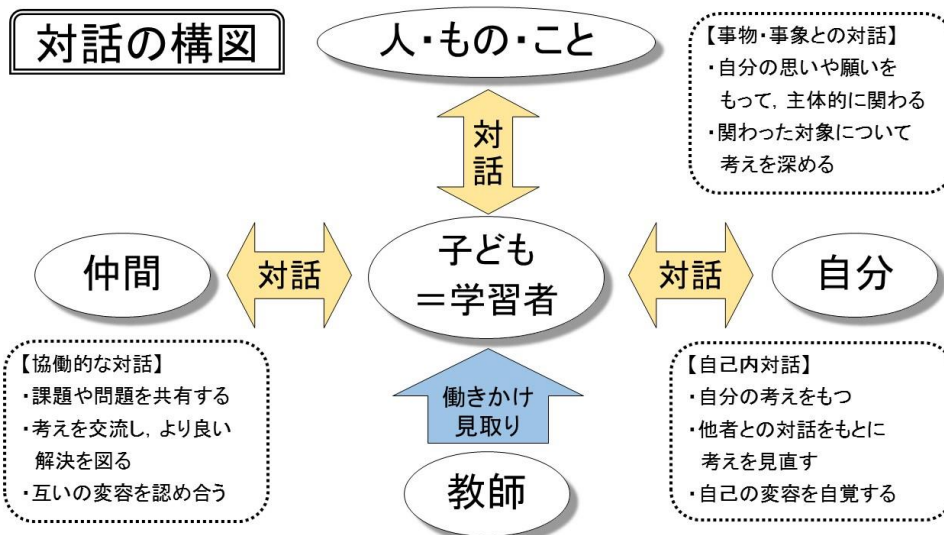
「応答し合う」とは、相手の問いかけに対して答えることである。従来、本校では子供たちが互いの考えを「聴き合い、話し合う活動」を問題解決学習の過程に位置づけてきた。しかし、ただ伝え合うだけでは、互いの考えを表面的に理解するだけに留まってしまう。分からないことを問いかけたり、他の様々な考えについて尋ねたりする者に対して、その問いを受けとめ、答えを返す者がいることにより、対話は成立する。つまり、対話においては、伝える力と聴く力が重要であるといえる。

「相互作用する」とは、問う側、答える側が互いに影響を与え合うことを表している。対話は、問う側と答える側が役割を交代しながら進んでいく。問う側は相手の答えを聴き、自分の考えを見直して新たな考えをつくり出す。答える側は、相手に自分の意図が伝わるように、話の内容や表現方法を変化させていく。このように、対話では互いが影響し合って、より深い理解が生まれるのである。

(2)対話の三つの側面

対話には、三つの側面がある。一つ目は、学習者である子供が、仲間とともに協働的に問題解決をしていく過程で行う仲間との対話である。二つ目は、学習者自身が解決の見通しをもち、自問自答しながら考えを見直していく自分との対話である。三つ目は、人(地域の人・先哲など)もの・こととの関わりを通して生まれる対話である。子供は、課題の解決に向け試行錯誤を重ねながら、人・もの・こととの対話、仲間との対話、自分との対話を繰り返し、思考を深めていく。教師は、個々の考えを繋げたり、揺さぶったりして子供に働きかけ、考えの深まりを見取り、フィードバックを行うことで子供の主体的な学びを支える役割を担う。

【図Ⅱ】



4. 問題解決学習の過程と対話との関わり

生活科・社会科における問題解決学習の過程と、対話との関わりを以下に示す。

【生活科】

過程	対話との関わり
①めあてをもつ	・直接体験を通して、自分の思いや願いをもつ。 【自分との対話】 ・「見たい」「聞きたい」「知りたい」という思いや願いを話し合い、共通の課題をもつ。 【仲間との対話】
②関わる	・課題を解決するために「人・もの・こと」と関わる。 【人・もの・こととの対話】 ・「人・もの・こと」との関わりを通して、自分なりの気づきや考えをもつ。 【自分との対話】 ・「人・もの・こと」との関わりから得た気づきを伝え合う。 【仲間との対話】
③振り返る	・仲間との対話をもとに、自分自身の気づきの良さや成長を振り返る。 【自分との対話】

【社会科】

過程	対話との関わり
①問いをもつ	・社会的事象を観察して気付いたことを話し合い、解決すべき共通の問いをもつ。 【仲間との対話】
②見直しをもつ	・既習や経験をもとに自分なりに予想を立てる。 【自分との対話】 ・予想や解決の方法を磨き合い、解決への見直しをもつ。 【仲間との対話】
③自力解決をする	・予想を確かめるために集めた情報を取捨選択する。 【人・もの・こととの対話】 ・わかった事実から自分なりの考えをもつ。 【自分との対話】
④協働して解決する	・仲間と事実や考えを発表し合い、質問し合いながら、社会的事象の意味や因果関係について考える。 【仲間との対話】 ・様々な立場に分かれたり、視点を決めたりして、考えを話し合う。 【仲間との対話】
⑤振り返る	・仲間との対話をもとに、自分の考えを振り返る。 【自分との対話】 ・自己の考えの変容を振り返り、深まりを自覚する。 【自分との対話】

5. 研究内容

(1)めざす子供像

学校教育目標「よく学び、豊かな心を持ち、たくましく生きる児童の育成」、および学校経営の重点「よく考え、学び合う子」を踏まえ、目指す子供像を以下のように設定した。

<低学年>

主体的に問題解決に取り組み、自分の気づきや考えを伝え合うことができる子

<中学年>

主体的に問題解決に取り組み、仲間との対話を通して互いの考えのよさに気付くことができる子

<高学年>

主体的に問題解決に取り組み、仲間との対話を通して互いの考えを磨き合い、深め合うことができる子

(2) 本年度の研究の重点

①生活科・社会科 **対話をしたくなる「魅力ある問い」の設定**

対話は、子供たちが事物・事象に出会い、自然発生的に行われるものであると捉える。しかし、その事物・事象が子供に寄り添った内容かどうかについては、教師の働きかけ(つなげる・揺さぶる)や意図をもった指導が必要である。魅力ある問いを提示し、自分事として物事を捉えて対話する児童の姿を目指す。

第1期の研究実践より、本校では、対話を生じさせる条件を、以下のように整理している。

＜対話を生じさせる条件＞

- 予想に反する事象や予想を上回る事象に出会い、驚きや矛盾を感じる時
- 事物・事象に対して、挑戦してみたい、できるようになりたいという憧れをもった時
- 経験によって得た知識や既習だけでは、説明することや解決することが困難な時
- 複数の考えの間で葛藤を感じる時

昨年度までの研究実践を生かしながら、より「問い」の重要性を強調し、子供の実態や社会の情勢など総合的に判断し、「魅力ある問い」を追究していきたい。

②生活科 **「気づきのよさを感じる」振り返り活動の充実**

社会科 **「思考の整理や見通しを持たせる」振り返りの充実**

振り返りや見直しを充実させることは、気づきのよさを感じて自己肯定感を高めたり、自分の考えを整理して次の学習の見通しを持たせることで主体的に学習する態度を養ったりする上で、重要な時間だと捉える。子供たち一人一人が人・もの・ことと向き合い、学びを深められるよう追究していきたい。

(3) 三カ年の研究計画

	年度	計画	内容
第1期	第1年次 2017年度 (平成29年度)	問いのもたせ方に重点を置き、「対話を生じさせる問い」を設定するための方法を探る。	教材開発 理論研究 授業研究
	第2年次 2018年度 (平成30年度)	対話への意欲や必要感をもたせ、思考を深めるための対話を生じさせる方法を探る。 【題材の精選】【教材・資料提示の工夫】【場の設定の工夫】	授業研究 公開研究会
	第3年次 2019年度 (令和元年度)	全員が対話に参加できるようにするための方法、気づきや思考を深めるための対話の質を高める方法を明らかにする。 【題材・テーマの精選】【場・ツール・板書の工夫】	授業研究 公開研究会
第2期	第1年次 2020年度 (令和2年度)	対話を支える資質能力を育て、「話をしたくなる魅力ある「問いや願い」のもたせ方を探る。 【題材の精選】【教材・資料提示の工夫】【発問の工夫】 【スキルトレーニング】【環境整備】	教材開発 環境整備 理論研究 授業研究
	第2年次 2021年度 (令和3年度)	対話と思考をつなげるための教師の働きかけや自己内対話をアウトプットする手立て 【題材の精選】【教材・資料提示の工夫】【場の設定の工夫】 【単元構成の精選】【振り返りの時間の確保】	授業研究 公開研究会
	第3年次 2022年度 (令和4年度)	物事を自分事として捉え、よりよい社会や自己の生活に生かそうとする深い学びの実現に向けた対話型学習の構築 【題材の精選】【教材・資料提示の工夫】【発問の工夫】 【学びの活用】	授業研究 公開研究会

6. 研究方法

(1) 基本姿勢

本校では、生活科・社会科における問題解決学習の過程で、対話を通して思考を深めることが基本の方針である。研究の具体的な方法としては、学年またはブロックごとに子供の発達段階に応じた「めざす子供の姿」を設定し、その姿に近づけていくための指導の在り方を追究していく。

(2) 研究授業

- ・第1年次(令和2年度)については、各学年1名が、年間1回、研究主題「どの子ども輝く生活科・社会科の授業」に則した授業提案を行う。
- ・第2年次については、全担任が、1学期と2学期の間に、1回授業を行う。公開研究会では、各学年1名が提案授業を実施する。「どの子ども輝く生活科・社会科の授業」を提案する。各部会で目標や重点について協議し、講師の指導のもとで研究を進める。
- ・他学年の授業についても積極的に参観し、研究を深める。

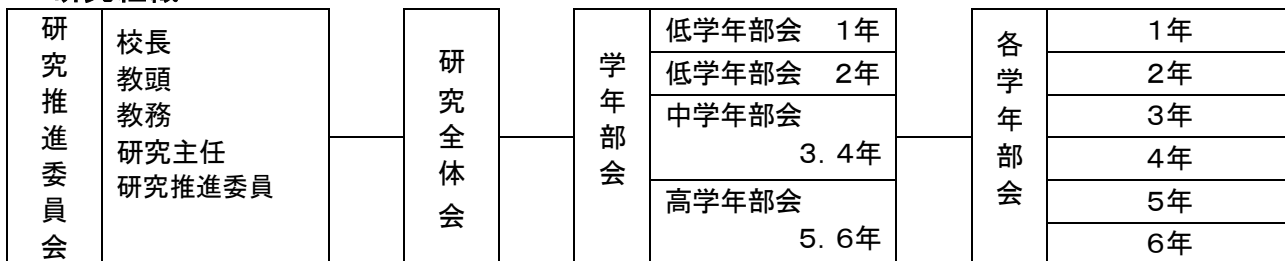
(3) 検証方法

子供の思考の深まりを検証するために、アンケートや抽出児のノート等を基礎データとして、子供の姿容を具体的・客観的に検証し、実践のまとめを作成する。

(4) 研究全体会(年間4回)

- ①研究概要提案 (5月20日)
- ②提案授業・協議会 (6月4日)
- ③研究全体会 (8月20日)
- ④来年度に向けて(2月後半)

7. 研究組織



8. 講師の先生方

[全体講師]		小幡 肇 先生 [文教大学教育学部発達教育課程 教授]
[低学年・生活科]	1学年講師	井桁 淳子 先生 [習志野市立藤崎小学校 主幹教諭]
	2学年講師	小幡 肇 先生 [文教大学教育学部発達教育課程 教授]
[中学年・社会科]	3・4学年講師	奈良 敬信 先生 [八千代市立大和田西小学校 教頭]
[高学年・社会科]	5・6学年講師	井合 威郎 先生 [習志野市教育委員会指導課 指導主事]

9. 主な研究日程

月	日	主な予定
4月	7日(水)	研究推進委員会 年間活動の計画, 研究全体会について
5月	6日(木)	研究推進委員会 第1回アンケートの実施方法についての確認
5月	20日(木)	研究全体会 今年度の研究の方向性について共通理解
6月	2日(水)	第1回アンケート結果の報告 アンケートを受けての各学年での取り組み内容を検討
6月	4日(金)	提案授業(研究主任) 協議会・全体講師小幡先生の御講話
6月	28日(月)	2学年 授業研究・協議会
7月	1日(木)	1学年 授業研究・協議会
7月	2日(金)	研究推進委員会 公開研究会の実施方法、今後の取り組みについて検討
7月	6日(火)	3・4学年 授業研究・協議会
7月	8日(木)	5・6学年 授業研究・協議会
7月 8月	下旬から 下旬ごろまで	公開研究会単元の指導案検討
8月	20日(金)	研究全体会 グループ討議
9月	1日(水)	研究推進委員会 研究授業に向けての準備, 記録の取り方等検討 実践のまとめ方の検討
9月	上旬	第2回アンケートの実施→分析
10月	8日(金)	研究推進委員会
10月	12日~24日	公開授業撮影
11月	4日(木)	全体提案のリハーサル
11月	18日(木)	公開研究会(PM)
12月	1日(水)	研究推進委員会 実践のまとめ方の確認
12月 1月	下旬まで	実践のまとめ作成
12月	13~17日 20~23日	第3回アンケートの実施 →分析

1月	12日(火)	研究推進委員会 アンケート結果の分析確認
2月	1日(火)	研究推進委員会 研究全体会に向けての成果と課題の検討 来年度に向けて
2月	10日(木)	研究全体会 今年度の研究総括・来年度に向けて
3月	上旬	次年度に向けての見通し

※ 参考文献

- ・『小学校学習指導要領解説 社会編』(東洋館出版) 文部科学省
- ・『小学校学習指導要領解説 生活編』(東洋館出版) 文部科学省
- ・『学びの美学』(東洋館出版) 嶋野 道弘 著
- ・『社会科授業が対話型になっていますか(明治図書) 安野 功 著
- ・『対話カトレーニング』(学陽書房) 丸岡 慎弥 著
- ・『対話型授業の理論と実践』(教育出版) 多田 孝志 著